



# 金融財政

2007年(平成19年) 6月4日 (月) 第9836号 (購読料金 月額税込み5,565円)

## 新自由主義の進展

お茶の水女子大学教授 篠塚英子



同僚に経済地理の専門家がいる。市町村別の所得と失業率や人口の関係などをカラフルな視覚的情

報に変換してくれる地理情報を感じて眺めている。私の経済地理への知識はこの程度の底の浅さである。

だからアメリカの経済地理学者デヴィッド・ハーヴェイの新著「新自由主義」(渡辺治監訳、作品社)を読み、あまりの華麗な分析手腕にたちまち魅了された。心酔している経済人類学者のカール・ポラーニ(1886~1964)の言説も引用されている。もつと早く、10年も前にこの本が出版されていたなら、私の日本銀行審議委員の時代にはバイブルになっていたはずである。

新自由主義の定義は「私的所有権、自由市場、自由貿易を特徴とする制度的枠組みの範囲内で、個々人の企業活動の自由とその能力とが無制限に発揮されること」によって人類の富と福利が最も増大すると主張する政治経済的実践の理論」としている。

この新自由主義が、政治および経済の

実践と思想の両面で1970年代以降、はつきりした転換を世界中で起こした。

サッチャー、レーガン、鄧小平、そこに日本の小泉純一郎前首相が連なる。世界の地理空間でこれだけの規模と深さを持った「変革は偶然では生じない」。本書はこの新自由主義が言説としてどこから生じて、わずか30年余りの間に、どうしてこれほどに増殖したのかを分析したものである。

乱暴な素描をご容赦いただきたい。アングロサクソン系の国では、福祉重視への傾斜から国家の資本蓄積の危機が高じ、その脱却を通じて階級権力の再構築が高まった。他方、途上国では、開発主義国家の限界と危機に直面し、その打開として展開された。では日本の位置取りはどうか? 監訳者の渡辺氏がこの点を追加論文に寄せて開陳している。日本は「前者のグループ第2列に位置すると同時に開発主義国家体制の側面をも持つ」と。

新自由主義化のプロセスは多くの「創造的破壊」を伴う。この渦中で日本では「労働ビッグバン」に拍車がかかるという国民の注視すべき課題がまた増えたようだ。

### CONTENTS

●解説	動き始めた設備改修、重要な「心」の対応 (平田賢典)	2	●あと・らんだむ	(神崎倫一)	11
	—ユニバーサルデザインと金融機関	2	●世界の金融—西・東	(ロンドン)	13
●BANCO	帰らざる河 (額賀 信)	3	●News Eye		
●照一隅	労働力不足への対応 (泰久)	5		温暖化対策で割れる米企業	14
●マーケットレーダー	(真壁昭夫)	7	●内閣府月例経済報告	〈5月〉	16
●国際経済	ホームを離れた中国叩きの始発列車 (斎藤ジン)	8	●News Eye		
	—米中経済関係を展望する	8		損保大手6社の07年3月期決算	17
			●財政金融ウォッチング	(4月前半)	18
			●追加型株式投信ランキング	〈4月〉	19
			●北風・南風	もみじ銀行 (広島)	20